

---

**極嬢 少女と竜の物語**

和了

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

極嬢 少女と竜の物語

### 【コード】

N9900L

### 【作者名】

和了

### 【あらすじ】

親父達にはめられた！！

仕事先に赴いてみると、何故か親類勢が揃い踏み。訝しげに様子を伺っているといきなりの爆弾発言。それに戸惑い放心している隙に色々勝手に進められて…

流されて気付いた時には後の祭。

なんなんだよ!?

……まあこれはこれで幸せなのかも知れない。  
なら精一杯楽しみますか

…つてなるわけねえ!!

そんな男とそれを取り巻く人々の日常をインスピレーションの赴くままに書き付けました(笑)

インスピレーション任せの作者による、流され系主人公の迷走伝  
(予定)です。

第一部『はめられた!』プロローグの様なもの(前書き)

初めての方ははじめまして。

そうでない方は申し訳ありません。

和了<sup>ホーラ</sup>と申す者です。

拙作はあらずじにもあるように、インスピレーション任せに書き付けたものです。

色々で見苦しい部分もあるかも知れませんが、生暖かく見守って頂けたらと思います。

…問題点の指摘や感想等頂けたら泣いて喜びます故、そちらも宜しくお願いします。

それでは

## 第一部『はめられた!』プロローグの様なもの

某年某日都内某所

数名の男達がある一室にて、何かを待つように佇んでいる。

その中で他の者よりも高価なスーツに身を包み、しかし華美には成り過ぎずどこか落ち着いた雰囲気醸し出す男が煙草をくわえる  
と……

スツ……

空かさず差し出されるライター。

『キンツ』と甲高い音を立て蓋が開き、『ボツ』と言つ音と共に  
火が点る……

すーっ……

ジツ、ジジツ……

最初の一吸いはゆっくりと薫りを楽しむように……

ふうー……

ゆらゆらと紫煙を<sup>ほく</sup>煙らす……

ピリリッ……

そんな男の至福の時間を破ったのは、一本の着信。

辺りに緊張した空気が溢れる……

直ぐ様に背後に控える男が応対する。

はい。いらっしやいます。

少々お待ち下さい。

電話の相手は判らないが、それが待ち望んだものであることを男は理解した。

「兄貴」

電話の応対をしていた男が声を掛けてきた。

「親父からです。」

視線を向け先を促すと、電話の相手は予想だにできなかった人物であつた。

「わかつた。」

驚愕の感情を理性で抑え込み携帯を受け取る。

「もしもし。」

竜児……

「はい。」

用件はわざわざ言うまでもないだろう。

……時間が決まった。

「……」

今から2時間後、場所は横浜だ。

詳しい場所は伝えてある。

「親父……」

言うな、竜児……確かに訳の分からない変な条件だ。

……だが親も絡んでいる、無視するわけにはいかんだろう。

「……分かりました。」

本当はお前に頼むことじゃないんだが……

奴からの指名だ。任せたぞ。

「お疲れ様です。」

そう答えた直後電話は切れた。

電話での連絡が終わり数分経った……

灰皿に煙草を押し付け火を消した。

「そろそろ行かなきゃなんねえか……おい、例の“物”は揃ってるんだろうな？」

立ち上がりつつ側に控える男に問い掛ける。

「こちらに。」

恭しく答えながら男はアタツシユケースを差し出してきた。

(……軽いな。)

受け取り、そう疑問に思いながらもそれを口にする事はせず、更に問いを投げ掛ける。

「金の方はどうなってる？」

「それは俺が用意しといたっす。」

それは問い掛けた男ではなく、若い男が答えた。

「何処にだ？」

「車に積んで置いたっす。」

「わかった。なら出る。」

「鍵はこちらに………お気を付けて。」



そう言つて男は深く頭を下げた。

「ああ……後は任せたぞ。」

数名の男達の見送りを受け男は出て行った。

「ふうー……」

今回の取引の事を思い浮かべながら煙を吐き出す。

「親父もよくこんな訳の分からない条件つけた………そんなけうちも切羽詰まつてるって事、なんだろうな………」

今回の条件があまりに理不尽なのは入ったばかりの若衆でさえ気づいている。

若頭の俺が気がつかない訳がないのは、親父も重々承知の事だろうが……

事の始まりは10日前、五十嵐興業の幹部が九条組の構成員に命取られた事が始まりだ。

俺が所属する九条組と五十嵐興業は、親父同士が盃を交わした事もある仲だ。

しかしそんな二つの団体だったが、若い連中が騒いだ結果相手の

幹部を殺つちまう、なんて事故が起こった……

それに五十嵐興行はお冠。更に便乗するかのように親である一橋会まで出張ってくる始末。

しかし当事者だけでは收拾はつかず、取引にて終着をみせた。

今はそのけじめをつける為、取引場所に向かっているのである。

『若頭』である俺が“1人”で運んでいる、この状況はかなり異常だ。

五十嵐興業曰く、死んだ男は若頭補佐の人間だったとの事。

うちにその地位に着く人間が居なかった事が更に話をややこしくする事になったのだ。

当初の要求は俺。

一番近い位置と言う理由らしいが、正直な所同格と扱われるのは癪だ。

下の喧嘩に出て来たことも気に入らないが、それで死ぬなど虫酸が走る。

結局は協議結果、莫大な金とある“物”を五十嵐興業に渡す事で決着が着くことになった。

俺が1人で受け渡しすると言う条件で……

『九条 竜児』

それが俺の名前。

歳は28。

もついい歳だが結婚はしていない。

組に入ったのは18の時だから、10年はこの道にいる。

10年や其処らで若頭と言つのは、親族と言つこともあっても異例の出世である。

最近は取り纏めるのが仕事になってしまつて自分で動くのは久しくなかつた。

「しかし…後ろの金は分かるが、この鞆には何が入ってるんだ？」

とある“物”が何なのかはうちの親父である『九条 信晴』と、五十嵐興業組長『五十嵐 克治』、2つの組の直系の親である一橋会会長『一橋 嘉正』の三名だけが知っているそうだ。

絶対にその場に着くまで開けるな。

そう言われただけで何の情報も無い。

せめてもの抵抗に軽く振つてみたのだが、中から聞こえるのは僅かばかりの固形物のぶつかる音。

「皆目見当もつかないな……何かの権利書とかかもしれないな。」

などと運転中の思考の端で考えていると目的地が見えてきた。

「初めて来たが……なかなか悪くないな。」

取引場所に指定されたのは、横浜にある高級ホテルであった。

その建物を何の気なしに眺めていると……

「ブウー、ブウー……」

携帯に着信がきた。

（……知らない番号だな。）

携帯の画面は知らない番号であることを告げていた。

（時間は……約束の10分前）

取引関連の電話だろう事は考えなくてもわかった。

「もしもし。」

……九条さんかい？

「そうですか？　そう言う貴方は？」

俺の事は後だ。

“物”は何処にある？

「金は車に、“物”は手元に。」

なら金は車に積んだままで“物”だけ持ってフロントまで来い。

男はそう言つと、此方の反応を見ることなく電話を切つた。

「……なんなんだ、いつたい？」

訝しげに思いながらも指示通りに車を駐車場に付け、“物”をもつてフロントに向かつた。

「九条様ですね？ お待ちしておりました。」

フロントに到着するや否や、いきなり声を掛けられた。

見覚えの無い女性で、年の頃は20代中頃と行ったところか。

「ん？ ……あんたは？」

「九条様の案内に遣わされました五十嵐克治の私設秘書の『三橋瑞枝』<sup>みづえ</sup>で御座います。以後お見知り置きを御願います。」

「あ、ああ宜しく頼む。」

そう答えつつ違和感覚えた。

（私設秘書だと？ 今日の取引で秘書なんているのか？

本当に訳がわからない……五十嵐は何を考えているんだ？）

場所が場所だけにドンパチ騒ぎになる可能性は低いだろうとは予想していたが、あまりにも場違いでわ無いかと思われる人物の登場に困惑してしまう。

「それでは早速ですがご案内させて頂きます。……宜しいですか？」

此方の反応の悪さを感じてか、三橋嬢は訝しげに確認をとってきた。

「すつ、すまない。宜しく頼む。」

疑問に思いながらも此処で話しても埒が明かないと思い直し案内を頼むことにした。

「……それでは此方で御座います。」

こうして俺は取引場所に案内されていった。

「彼方で御座います。」

三橋嬢の案内で通された場所は最上階に位置するレストランだった。そこにはすでに人が来ているようである。

雰囲気造りの一環か辺りは薄暗く人物の人相は判別出来ない。

(6人か? 多いのやら少ないのやら……)

「九条様をお連れ致しました。」

三橋嬢が先じて先に到着していた人物の1人に話しかけた。

「そうか。お前は下がっていい。」

「はい。失礼します。」

そう言っで一礼し三橋嬢はその人物の後ろに下がった。

近づいたことで三橋嬢が応対した相手が五十嵐 克治である事がわかった。

……がしかし、後の5名は影の影響か已然として判別出来なかった。

「久しぶりだね、竜児くん。わざわざ遠い所まで申し訳ない。」

「お久しぶりです、五十嵐さん。今回はうちの若衆を纏めるはずの私の失態ですので構いませんよ。」

フレンドリーに話し掛けてくる五十嵐に若干戸惑いつつ今日の取引の件を促す。

「おいおい、竜児くん。君と私の仲じゃないか、そんな堅苦しい喋り方でなく、昔みたいに『叔父さん』と呼んでくれよ。」

何を隠そう五十嵐 克治とこの俺九条 竜児は血縁なのだ。

九条組組長であり竜児の父でもある信晴の妻、香澄は克治の妻の姉にあたる。

以前はお互いの家を行き来していた事もあった。

竜児が組に入った頃から付き合いは希薄になっていたが……

「状況が状況ですし、お互い……………もうそんな年でもないでしょう。」

「むう……………」

今の関係を明確にしつつ返すと、不満げな表情をされた。

「相変わらず堅いな、竜児。」

今まで隠れていた人物が唐突に話し掛けてきた。

「……………は？」

聞き覚えがありすぎる声に思わず間の抜けた返事をしてしまう。

「は？じゃねえよ。お父様に向かってなんて口聞きやがる。」

そこに居たのは父である信晴であった。

「あらあら。知らぬは本人ばかり、なんてそんな状況でまともな返答を期待する方が酷でしょ？」

更に母の姿まで……

「……まだ親父がいるのはわかるんですが、なぜ母さんまで？」

あまりに突飛な状況に頭が回らない。



「それはとりあえず、取引を進めつつ説明しよう。」

そう克治が促してきた。

状況が読めず混乱している状態だった為、渡りに船と頷き、手に持つ鞆を差し出した。

「よしよし。それじゃ開ける……っと、その前に芳江よしえ、春香はるか。」

鞆を受け取った克治は直ぐ様解錠するかに思われたが、思い直したかの様に後ろに控えていた人物に呼び掛けた。

(芳江？ 春香？ まさか……)

克治が呼び掛けた名前には聞き覚えがあった。それぞれ芳江が妻で、春香が娘だったはずだ。

「はいはい。なんですか？」

「とりあえず久しぶりに会ったんだから、挨拶くらいどうだ？」

「そうですねえ。竜児くんお久しぶりです。ほら、春香も。」

「りゅっ、竜児さん！ お久しぶりゆっ……」

「お久しぶりです。まさか芳江さんと春香ちゃんまでいらっしやるとは……」

まさかと思つた予想は大はずれだった様だ。

芳江はいたずらが成功した子供の様に、春香は噛んだことが恥ずかしいのか赤面して俯いてしまっていた。

「と言うことは、最後の一人はやっぱり？」

「なんやあ、気付きよったか……此処まで気付かんのやったら最後まで通しいや。」

「やはり一橋会長ですか。」

最後の一人は一橋会会長一橋 嘉正であった。

「ほんまかったいなあお前は………わしの事も昔みたいに『お爺ちやま』って読んでくれて構わんぞ？」

嘉正が言うように確かに嘉正は竜児の祖父であり、かつ竜児の母である香澄と春香の母である芳江の父でもある。

「そんな呼び方をした覚えは御座いませんよ。

……しかし、いよいよ訳が分からなくなって来ましたよ。今日はうちの若衆の不始末のけじめ付けるため集まったはずですが？」

「まあちよつとまてや。」

「せつかちはもてへんでえ？」

竜児の質問は信晴と嘉正に諷められてしまった。

その不満を両者にぶつけ様と口を開きかけたが……

「そしたらとりあえず鞆開けましょうか。」

克治そう言い鞆のロックを外した。

運んでいる最中も疑問であった鞆の中が分かるとあり信晴と嘉正への不満は成りを潜めた。

(中に何があると言っただ?)

そこには……………

何かの書類と円筒形の筒が納められていた。

「これがなんだと言っんですか? 書類と、印鑑?」

「まあよお見てみい。」

嘉正にそう促され、書類に注視してみると……………

『婚姻届』

と書いてあった。

「は?」

またもや間の抜けた返事をしてしまう。

「とりあえずや……………」

竜児、お前春香と結婚してもらっから。」

「は!?!?」

こうして俺の結婚生活が始まりを告げたのであった。

## 第一部『はめられた!』プロローグの様なもの(後書き)

まずは読んで頂きますありがとうございます。御座います。

如何でしたでしょうか？

今作に限らず知識は記憶を頼りにしております故、色々と変な表現もあるかもしれませんが…

自分でもたまに読み返し、変だと感じた部分は随時更新して行きます。

次話以降も宜しくお願い致します。

前作を読んで頂き次話をお待ちの方に…(いるかな?)

最終更新から長々と空いてしまい申し訳ございません。

リアル事情により執筆出来ていなかった期間が長すぎて次話の構想到に難儀しております。

今作はその構想を練っている時に生まれたものになります。

連載を続けるつもりではありますが、期待せず気長にお待ち頂ければと思います。

それでは。

## プロローグの様なものの続き（前書き）

毎度御世話になっております。和了で御座います。

不定期とは再三申し上げておりましたがまた1ヶ月半も間を空けてしまいました事大変申し訳ないです。

お詫びはこの辺で本文をどうぞ・・・・・・・・

## プロローグの様なものの続き

「竜児、お前春香と結婚してもらおうから。」

嘉正より発せられた言葉は予想だにできなかったものだった。

「は？」

あまりにも予想外のものだった為思考が追いつかない。

「だから、結婚だつて。」

竜児のまの抜けた発言に、聞こえなかったのかとも思ったのか信晴が変わらぬ事実を伝えてくる。

「……誰と誰が、だつて？」

嘉正の言葉は聞こえていたが、頭が理解出来ていない為再確認を取る。

「竜児と春香ちゃんが、よ。」

この質問に答えたのは香澄であった。

「竜児くんなら喜んで任せられるわ。」

こちらは芳江の言葉。彼女は何が嬉しいのか、現れた当初から終始ニコニコと笑顔である。

「ああ。私も前々から息子が欲しいと思っていたかが……それが本当の息子の様に思っていた童児くんなのは素直に嬉しいよ。」

「俺としては童児みたいなちつとも可愛くない糞生意気な野郎よりも、春香ちゃんみたいな素直でおしとやかな娘が欲しかったからな……よくやった、息子よ！」

芳江の発言を受け、克治と信晴がそう言ってきた。

「……春香ちゃんはまだ中学生位だったと？」

芳江と克治、それから信晴の発言はとりあえず無視し、動きの鈍い頭を酷使しつつ尋ねる。

「今年から高校生だよ、春香は。明日になれば歳も16になるから、親の同意があれば法律的にも問題ない。」

克治が本当に嬉しそうに答えてくれる。

「……いつだ？」

問題点であろう春香の年齢の事を理論的に返され、苦虫を噛み潰したような声で質問を重ねた

「いまこの場で、だ。」

……と言っても取り急ぎ紙に書くつてのが今出来る事だけだな。提出は明日の朝一。式の日取りとかは追々だ。」

信晴は嬉しそうに今後の予定を述べていく。その顔は童児の反



応を面白がっているのか、にやけた表情を浮かべている。

「……………決まったのは？」

信晴のにやけ面に苛つきつつも冷静に確認をとる。

「話事態は前々から考えとった。せやけど、そないな事言つても竜児承知せんやろ？ せやからお前には言わん様にしとったんや。ただまあそろそろ言わなあかなあ、って思つてた所に渡りに船なこの騒動。ちよつどええわつてな訳で、ちよつと前に決まったんや。」

嘉正が事も無げにそう宣のたまつた。

「知らぬは己だけ……………母さんの言つてた事は此の事か。」

「そうゆことや。」

「……………ちなみに、拒否権は？」

最後の悪足掻きとばかりにそう言つた所……………

「……………ない！」「……………」

と、嘉正を筆頭に信晴、克治、香澄、芳江の5人に言い切られてしまった。

「ふう……………。分かりました。」

「おお！ わかつてくれたか。竜児の事だ、そんな事言つたら暴

れ回るんじゃないかねえかと冷や冷やしてたんだが、杞憂だったみたいだな。」

「此処で暴れて解決するなら暴れさせて貰いますが？」

「なんも変わらんよ。此は決定事項や。」

「でしようね。……………はあ。」

諦め混じりにそう言った後、竜児は大きくため息をついた。

「……………そんなに嫌ですか？」

と言ったのは、今まで黙り込んでいた春香だった。

「私は竜児さんと結婚、嫌じゃないです。竜児さんは私の事嫌いですか？」

「いつ、いや、そんな事は無い。だが春香ちゃんはいいのか？歳も君と一回りも離れているし……………」

春香の発言に狼狽しつつ自分の問題点を指摘する。

……………言っていて悲しくなるが。

「年齢なんて関係ありません！」

叫ぶように春香は言い放つ。

「そつよ歳なんて関係無いわよ。」

とは香澄の談。

「そうそう、春香と姉さんの言う通りよ。愛があれば良いの、愛が。」

春香と香澄の発言を受け芳江が、ニヤニヤしながら春香を見つつ補足する。

「……………」

芳江の言葉に春香は耳まで真っ赤になって黙り込んでしまった。

「…………愛うんぬんに関しては何も言いません。確かに春香ちゃん  
の事は妹の様に思いながら可愛がっていましたが、久しぶりに会って美人になったと思います。」

「ならいいじゃねえか。」

竜児の言葉に信晴が返す。

「…………とは言え、いきなり結婚しろと言われて『はい、分かりました。』と返せるほど剛胆な精神構造をしている訳じゃ無いです。」

春香が嫌いと言うわけでなく、状況が悪いと言うことを伝える為の言葉を続けた。

それを受けた嘉正が

「…………竜児……………」

と呼び掛けてきた。

「はい、なんですか？」

何の気なしに嘉正の呼び掛けに答えた瞬間……

「「じゃじゃじゃうっさいんじゃほけえ！」

「へっ？」

吼えた。

それを見た信晴と克治は『あちゃ〜』と言った様子で頭を抱えてしまった。

「へっ？ じゃねえんだよ！ さっきから聞いてりやぐだぐだぐだぐだ……理屈ばかりくっちゃべりやがって。」

香澄と芳江は嘉正と、それぞれの夫の様子を見ながらニヤニヤしている。

「こんな別嬪な嫁やるってつってんだ、『はい、喜んで』って言うてのけるのが漢おとこつてもんだろうが！」

その間に嘉正のポルテージはどんどん上昇していく。

「それをなんだ！？ 歳が離れてる？ 状況が悪い？ つまんねえ事言っつてんじゃねえよ！」

「ちよっ、親父。 落ち着いてくれよ！」

嘉正の剣幕さに克治が宥めようとするが……

「これが落ち着いてられるかっ！　ずっと目に掛けてた竜児に裏切られたんやぞ！？　……まさかこいつがこんなへたれとは思わんかった。」

（おいおい……しかしこれが例のあれか。　確かにおっかないもんだ。）

普段は好好爺然とした嘉正だが、過去にもこの様な剣幕に陥った事がある。

一度目は信晴と香澄の婚約の時、二度目は克治と芳江の……結婚話の時ばかりである。

竜児が嘉正の過去の例に思いを馳せていると……

「竜児！！」

嘉正が興奮を諫めようとせず、改めて竜児を呼ぶ。

「何でしょうか？」

竜児は竜児で、あくまでも冷静に嘉正の呼び掛けに答える。

「選ばせてやる。　春香と結婚するか……。」

嘉正は一度そこで溜めを作る。

「結婚か……」

思わず聞き返す。しかし伊達に10年この世界で生きて来たわけではない童児には先に続く言葉に予想はついている。

(恐らくこの後に続く言葉は……)

(死ぬか。)

「去勢か。」

.....

「へっ?」

嘉正の思いもよらぬ発言にみたびまのぬけた返事をしてしまう。

「こんな別嬪な春香あ見て、モノにしたるって気概見せへん様なモンならいらへんやろ?」

「なっ、なんでそうなる!?!」

余りにも滅茶苦茶な物言いに目上を相手にしているにも関わらず敬語を忘れてしまう。

「なんや、いるんか?」

「断固所持継続を求めます!」

「なら結婚し。どっちかや。俺としてはどっちも可愛い孫やし、お互い幸せになって貰いたい思てんねん。」

「そんな理不尽な。いきなり過ぎて結婚なんて……。」

「そうかもな。……せやけど、どの道いつかは春香は結婚相手探すつもりやった。せやったらお互い憎からず思ってる相手のがええやろ?」

「まあ、それはそうでしょうが……。」

「なら早う決めや。……ちゅうかそろそろ面倒やから、10数えるまでに決めんかったら去勢な。1、2」

「ちよつ!?!」

「3、4、5」

祖父の余りにも非情な発言に慌てた様子を見せるが、嘉正は意に介した様子も見せず数を数え続ける。

「娘は欲しかったが、お前が娘になってもなんも嬉しく無いぞ。」

「息子が娘になっても愛せるかしら?」

両親は息子の立っている状況が面白くて仕方がない、といった様子を隠そうともせずニヤニヤとした表情をしている。

「竜児くんは春香の何が不満なのかね? 身内鼻唄だと思わなくもないが、この娘はなかなかの器量良しだと思っただが。」

「残念ね、春香。大好きな竜児お兄ちゃんが“お姉ちゃん”になつちやうみたいよ。」

五十嵐夫妻は夫妻でどこかずれた事を言っている。

「……お姉ちゃん、か。」

春香に至ってはそれも悪くないかもしれない、とでも考えている様である。

「6、7」

「はあ。何を言っても変わりはない、か……。」

「8、9、じゅ……」

「分かりました。……結婚させて頂きます。」

「……う。決断が遅すぎるがまあええやろ。」

こうして竜児と春香の結婚生活は始まりを告げたのだった。



## プロローグの様なものの続き（後書き）

とこんな感じで主人公がいじられ続ける話を考えております。

まだまだ若輩の身ゆえ御見苦しい部分等御座いますでしょうが、暖かい目で見守って頂きたい。

またご指摘や感想等は随時受け付けております。　というか下さい（爆）

それを励みに頑張りたいと思いますので宜しくお願い致します。

それではまたの機会に……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9900/>

---

極嬢 少女と竜の物語

2011年11月16日09時58分発行